

BOOK Review

ナラティブホームの物語 終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ

評者

高山義浩 沖縄県立中部病院感染症内科・前厚生労働省 地域医療計画課



医聖ヒポクラテスは、医療で一番大切なことはクリニコス klinikos であると弟子に示したと伝えられている。クリニコスというのは、「病人の枕元で話を聞くこと」であった。クリニコスは、その後クリニック clinic となり、これを明治の先人は「臨床」と訳した。ところが、20世紀の革命的な医療技術の進展によって、医師は患者の話を「聞く」よりも、自分の話を「聞かせる」ことが仕事であると考えようになっていった。そして、連綿と古代から守り継がれてきたはずの「臨床」の心が遠ざかりつつある。

本書の著者である佐藤は、そんな時代にあってなお、ひたむきに患者と向き合いながら話を聞き、そこにある物語を追い求める医師である。本書には、高齢者医療をめぐる語られた次の著者の言葉が収められている。すなわち、「高齢者医療は、人が、人として、人間の最期の生を援助する高度専門医療である」とし、「必ず訪れる死に対して、何らかの納得を、つまり物語的な理解を、関係性の枠の中でしっかり捉えていく必要があるのではないだろうか」と。そして、技術や制度に縛られる病院では高齢者を物語的に支えられないと直観した著者は、地域の中核病院を辞して、目の前の患者たちの残された「生」について真摯に向き合う道を選択する。

本書には、二つの物語がモチーフとして用いられている。ひとつは、著者自身が家族や友人、同僚たちとの関係

性の中で自らの役割を模索してきたという物語。もうひとつは、患者（いや、高齢の生活者と呼ぶべきか）たちとの出会いの中で育まれ、ときに励まされて成長してきたという物語だ。ただし、著者にとって、家族も、友人も、患者すらもない。ただ、人生で交わることでできた豊かな人間模様として、その出会いが濃厚に語られている。いわく、「目の前に横たわっているただの寝たきりの老人ではなく、その人との関係性を持ち続けることで、自らの意識の中に、実にリアリティーをもってその人が現れてくるということがある」。こうした一見難解な地文が、随所に現われるのだが、抵抗なく腑に落ちてくるのは、これを丁寧に物語としてゆく著者の温もりゆえかもしれない。

さらに、本書では、単なる医師の業として紹介しえないほど多彩で、アイデアに満ちた取り組みに驚かされる。更衣を容易にする新しい病衣「スッポリん」、逆流の起こらない経腸栄養剤「マステル」、そして高齢者が最期まで暮らせる「ナラティブホーム」。おそらく著者は、人間との出会いをその原動力とし、人生そのものとしているようだ。また、出会いを大切にすることこそが臨床の生まれる場としている。そのことに気が付くことができれば、医師はふたたび患者の話を「聞く」ようになるだろう。

最後のページまで読み終えたあと、地域医療に携わる者として、ヒポクラテスの背中が見えてきた気がした。

佐藤 伸彦 著

A5判/272頁/2015年/定価(本体1,800円+税)/ISBN978-4-260-02098-5/医学書院 刊